

本論

1. 試考対象

1.1 試考対象概要

1.2 R.Collova インタビュー

1.1 試考対象概要

ここでは、本論における試考の対象となる建築計画についての概要、および未訳海外雑誌の筆者による翻訳を示す。

概要¹

1
『a+u』347、1999、p.92による。

所在地：イタリア シチリア州トラパニ県サレミ市

主要建築家：Alvaro Siza, Roberto Collova

プロジェクト開始日（聖堂）：1984年

プロジェクト開始日（アリチア広場）：1991年

共同参画者名（聖堂）：O.Marrone, V.Trapani, E.Tocco, G.Ruggieri, F.Tramonte, K.Muscarella, M.Ciaccio, G.Malventano, R.Viviano(architects), A.Lo Sardo

共同参画者名（アリチア広場）：O.Marrone, A.D'Amico, P.Traballi, A.Argento, F.Tramonte, K.Muscarella, M.Ciaccio, R.Viviano(architects), A. Lo Sardo

『Casabella』536、Electa S.p.A.、1987.6

Pierre-Arain Croset "Salemi e il suo territorio / Salemi and its territory"

サレミにおける都市計画は、以下のように分類することができる。

ひとつは、街の歴史的な中心地区における再生と復興の計画群。ひとつは、1968年のベリーチェ（Belice）地震後に新たに建設された地区において発展・完成した計画群。ひとつは、丘陵の坂に建設予定の大公園と同様、街の2つの中心を結ぶ計画群である。

今日、サレミにおける質の高い建築のひとつとして、カルミネ（Carmine）地区に最近完成した屋外小劇場（teatrino）がある。これは、地域自治の固有で文化的な方針の結果といえるもので、それは1980年のベリーチェ会議（Belice Laboratorio）において発表された提案とアイデアを継いだものである。

注目すべきものとして重要なのが、アルヴァロ・シザ（Alvaro Siza）のグループによるもので、その計画群は、街の歴史的な中心地区における介入の明瞭な視点を示すものである。すなわち、廃墟と地震によって出来た空隙を新たなプロジェクトの素材として用いる独創的手法である。

丘陵に沿った風の通り抜ける道をサレミに向かって近づくに従って、街の歴史的な中心地区の城塞が、丘の後ろに現れてはまた消える。

街そのものとかくれんぼをして遊び、街を眺めるというこの非日常的な体験は、私が思うに、サレミ特有の形式的なアイデンティティを象徴するものである。

事実、こうしたアイデンティティの発見は、並外れたいわば「陸文化（Land Culture）」によって強く刻まれた現実を認識することによって始まるのだ。それは、都市と田園地帯、アラブとノルマン、中世とバロックといった、その様々な融和の手法によって裏付けられる。

サレミの場合、今日すばらしい居住の中心地区をもっているのだが、それは、ジベリーナ（Gibellina）のような街がほとんど全壊状態だったのにくらべて、サレミのほとんどの住居は地震後もなお居住可能であったからである。

サレミの歴史的な中心地区は地震後、最大の危機を経験した。それはシチリア地方自治体が、4つの細い街路の建設によって、地震以前の都市の骨組みを消しさるような都市の復興計画を執行した時期であった。

建造物の復旧に可能な限り重点をおこうとするまちづくりの方針へと転換したことで、この計画は街のさらなる空洞化を避けるのにも貢献し、この4年間で初めて、人口がゆるやかな微増に転じた。

カスキオ (Cascio) 市長の「見識ある」まちづくりの方針は、しかしながら、単に個人的公約におわるものではなく、彼特有の柔軟さの産物でもあり、提案を受け入れる許容性であったともいえるもので、ジベリーナ (Gibellina) 小学校の教室で1980年9月に行われた「ベリーチェ (Belice) 1980」計画ワークショップの招待建築家チームによる影響や代替案であった。

ピエルイージ・ニコリン (Pierluigi Nicolin) を筆頭とする、パレルモ (Palermo: パレルモ大学) の建築学科の教授チームと4人の市長による協働的努力の結果、このワークショップは「復興 (Reconstruction)」に由来する問題への建築的解を与えようとする初の具体的試みであった。またこのワークショップは土着的伝統に鋭いまなざしを向ける計画思想へと至るものであり、いわゆる「復興計画思想 (Planning Culture)」に対しては強く批判的であった。

たとえこのワークショップによる発議が、11の参加自治体によって異なる結果となっていたとしても、サレミにおいては、そのときすでにほぼ完成されていた基本構想が、このワークショップから生まれた提案をダイレクトに受けついでいたものであったため、当時のまちづくりの方針を決定する主要な要因をなした。

アルヴァロ・シザのチーム (ロベルト・コロヴァ Roberto Collova、ヌーノ・ロペス Nuno Lopez、エドゥアルド・ソウト・モウラ Eduardo Souto Moura) の提案の主題は、幼稚園の建設と並行して、Chiesa Madre (聖堂) の後ろにあるサレミの歴史的な中心地区の一部を再構成しようとするものであった。

この計画は、歴史的な中核と新たな「復興 (Reconstruction)」地域との関係を考慮に入れながらも、総じてサレミの領域全体へと広がるものであった。

しかし、シザたちのチームによる仕事が最も一貫して痕跡を残してきたのは、街の歴史地区の中においてであったが、それは、他の重大な被害を被った場所へと正しく適応されるべき介入手法の試みによるところがあった。

それは、廃墟を統一的に整備するというコンセプトに基づく手法であった: 「地震によってできた廃墟と裂け目が、計画のための素材となる」。シザにとって、このワークショップの経験が、すでに開かれていた Chiesa Madre の建設地と、レクリエーション活動の為に広く再構成されようとしていた Piano Cascio 地区の実施基本計画をもたらした。

きわめて知的に、この聖堂の基本計画は、聖堂の様々な部分を露出させ、聖堂全体の通路をなぞった広場の背景として使いながら、まるで巨大な彫刻のように absis の外へとこの廃墟を切り取ることを提案したが、さらに、広場にある、全滅から逃れた単体要素または装飾の断片であった列柱の基石が挿入される。

この「廃墟からの構成 (composing out of ruins)」は、歴史地区の2番目に大きな建設地に再びみられるわけだが、それは重度に被害を被ったカルミネ地区であり、倒壊の危険性を完全にクリアした地域である。

この「オバケ地区 (ghost neighborhood)」の計画のため、フランセスコ・ヴェネツィア (Francesco Venezia) —彼は「裸の建築 (strip architecture)」を好んでいたが、このテーマを大きなスケールで取り組むチャンスに初めて恵まれた—が招かれた。

ヴェネツィアの計画は、マルセラ・アプリッレ (Marcella Aprile) とロベルト・コロヴァとのコラボレーションでデザインされた。この計画は、長く続く公園にその姿をあらわしながら続くテラスのような、その場所の活動 (land movement) や控えめな取り壊しといった手段による、地区全体の文節・解体 (desmantling)

を提案するものであった。

最初に完成した部分において、この地区全体の未来の姿がどうなるかを確かめることは、すでに明らかに可能である。

壁面の水平性によって示される、大テラスとしてまずあらわれてくるものは、われわれがだんだんと近づくにつれて、テラスがそれ自体、古い建物の建築材料を用い (dig) ながら、オープンな小劇場としてあらわれてくるという姿である。

この劇場から、2つの非日常的な眺めをみることが出来るだろう:この一帯のふもとにあるがらんどうの広地、そして丘を下る街全体の眺めである。

こうしたユニークな公園広場は、新しい地区と古い街との間の坂に設けられる大きな都市公園と、距離を保ちながらも対話するだろう。この公園のコンペは、1985年の9月に招待によって行われ、アルヴァロ・シザやオスワード・マティアス・アンガース (Oswald Mathias Ungers)、そしてグレゴッティのグループ (Gregotti Associati) らが参加した。

当選したグレゴッティのグループによる計画は、場所全体にわたって上っている機械化された連続する直線の提案をみれば、3つの中ではより都市的なものに思える:この提案は、この一帯の機能的な変質をなす、真に手作りのもの—この公園の様々な施設がその周りに配置される2重の壁—という強い形式的存在に重点をおいている。

アルヴァロ・シザの計画は、それに対して、統一された花壇による植栽計画とともに、土地の農業的状態の統合を基礎としている。また同時に、2重の順路のシステムが、明確な視覚的軸によって創出される:ある側では、上りの順路であり、はじめに丘の頂上にあるTV塔に向かい、少し曲がって、まるで考古学の発見のように復元された滝に沿って行き、人が歩くことが出来る彫刻のようなものへと変化していく。また他の一方では、この一帯特有の山岳地形を測るような輪郭線の動きをたどる、風の気持ち良い順路であり、それに沿ってオープンな小劇場が設けられる。

オスワード・マティアス・アンガースの計画は、hortus conclususな主題を、直交する規則的な植樹を囲む大きな方形の広場—公園全部の施設を受け入れる5m幅の何も無い壁—を提案することによって完全に解き明かしている。

この計画の一見したシンプルさを超えて、この一帯の山岳地形に触れるこの大きな広場という異形が、ある人間にその坂道のイレギュラーな道行きをどれだけ感じさせるか、あるいはこの公園のイメージが、シチリアの伝統的な「オレンジグローヴ (Orange Grove: オレンジ畑)」という誇張的表現をどれだけ喚起させるか、ということを見るのは面白いことである。

小さな吊り花壇からカルミネ地区の「みんなの花壇 (Public Gardens)」と大きな公園へと、行政側のまちづくりの方針による緑化の主題は重要性を帯び、またこの主題は、サレミの農業的生業を保存するという決定に深く根付いている。

都市地のアイデンティティがその周りの農業田園地帯との明確な関係性を持たない一方で、技芸・芸術的な作品・民家の純粋な集積であるかのように未だに見えるギベリナとは異なり、サレミは、現時点でつねに対立してきたといえる2つの都市的現実を、確かに結合しようとしているのだ。

「多元的 (polycentric)」なシステムによる生活の創出における成功への挑戦によって、サレミは、その原点、すなわちこの丘陵地の Elimians の最初の街という一時代、あるいはその初めの痕跡は今ようやく考古学調査によってベールを脱がされようとしている「アリチアの多元都市 (polumetric town of Alicia)」へと回帰する事は、観念的におそらくではあるが、不可能であろう。

『Domus』813、Editoriare Domus S.p.A.、1999.3

Francoius Burkhardt "The rebuilding of the Mother Church and redesigning of Piazza Alicia and adjacent streets at Salemi, Trapani"

シチリアにおける1968年の地震以後、数々の再建計画が起こされた。しかしながら、当地の雰囲気特別な関心を向けながら小さな街の公共空間を意識しようとする試みはほとんどされておらず、この計画のように説得力を持っているものはほとんどない。

このような目的を達成するには、歴史的な場所の魂を理解することだけでなく、それを新たに描く勇気を持つことが必要である。

ジベリーナのステファノ邸 (Stefano's House at Gibellina : 『Domes』718) は、アルヴァロ・シザ (Alvaro Siza) による部分と、地理形態学的要素を含むヴィットーリオ・グレゴッティ (Vittorio Gregotti) によるより理論的な部分との関係性をはらんでいる。

前者 (サレミのプロジェクトに関連している) ついていえば、コロヴァは20年以上の間、彼自身の進歩において情熱的に関心を持ってきた。一方後者は、シザの部分建築の専門的知識領域に誘うというメリットをもっている。さらにいえば、その建築家 (コロヴァ?) がサレミのプロジェクトの責任者であり、その制作活動がグレゴッティの弟子として始まり、彼の建築デザインの中でも価値ある時間を過ごしたミランの事務所で活動をするまで、グレゴッティのアシスタントとなったことは特記すべき点である。

サレミにおいては、2つの要素からなるインスピレーションにより、その環境の融合が非常にうまく行われている。建築家 (コロヴァ) はこの作業を、サレミ市民の悲劇的な歴史やその場所の記憶を思い出させるような要素を置くことでなし、そのうちのいくつかを彼自身 (の計画) に付け加えた。その結果、彼もまた正式なメッセージを送っているということは、一目ではなかなか気づかれないだろう。

実際、数多くのディテールが全体的にデザインの中へと消えて行き、デザインに強い統合力をもたせているのだ。たとえば、ヴァナキュラーな素材 (多くは石材である) の選択は、その種類や構造に基づいて、様々な方法で配される; 溝などの部分や軸線、斜線、素材と素材の接点、あるいは壁による雨水の吸収を抑えるためにファサード表面に取り付けられる石には重大の関心が払われる。

この目的のために、コロヴァとシザは、「古 (old)」と「新 (new)」を区別すべく、シンプルな要素の「アバカス (abacus: 頂板、そろばん)」を考案した。

配向性を示す手段としての役割を果たす (例えば広場の聖堂の外側表面に据えられた列柱などといった) 視覚的ポイントを置く事で、あるいはマトリックスを際立たせる意図をもった列柱を立てることで、あるいは、コンセプチュアルな幾何学で、であるが、これらの他においては非視覚的である。

住民にとって受け入れやすい親しみある空間を作り出す事で、あるいは引用した部分をコンテキストの中にとけ込ませることで、そして必要なある場所を示すサインを付け加えることで; そして、対照的でありながらも統一である素材を配置する事で、コロヴァは、他の様々な街における例となり得、すべての住民が大切にすであろう「民俗的要素 (folklore)」をとどめる事なく、暖かな空間を作り出したのである。

『l'architecture D'aujourd'hui』278、1991.12

1968年、サレミは地震に見舞われ、大聖堂 (Chiesa Madre church) が破壊された。

このプロジェクトは、廃墟を再建するというよりは、むしろいしえの聖堂の姿を修復し、聖堂を再び運営可能にする事に目を向けていた。

これは、聖具庫や礼拝室の整備や、聖域といったような意味合いとして地震の遺物を利用することで行われた。この作業のあと、広場の外で(まちの基礎となる部分の)敷設が行われた。

そして2つの場所が規定されたわけであるが、1つは聖なるもので、この聖堂のバシリカ(Basilica)平面をなぞるものであり、もう1つは俗なるもので、やや低いレベルに計画されたものである。

記憶を働かせながら、このプロジェクトは引き算や統合、再利用そして修復によって特徴づけられた。

それは、この聖堂と広場に隣接した諸建築との境界の一部であるが、それらはこのプロジェクトと同じ精神をもつであろう。

『Lotus International』 106、Elmond S.p.A.、2000

"Minimal Acts in the Historical Fabric"

<街路 - 高さの多様性>

上方の街へと上る道筋に、7つの異なる操作をおこなった。

特に、壁面外部の広場からヘアピンカーブでアリシア広場ばで上っていく道のデザインは、他の街路や他の都市空間をともに対処している。

それぞれのプロジェクトは、新たな要素を導入すると同時に、既存の部分を再利用・統合しながら、既存の構成と連続性・断絶性とを結びつけている。

<境界>

アクセスのしかたや高さといった既存の違いに従って変化するよう、異なる解決手法が計画されている。

主な解決手法は3つある:外壁に揃えられ、様々な高低差をもったトラパーニ石によるもの;石路階段によるもの;多様なスロープによる石の傾斜路でつくられたエントランスによるもの。

このプロジェクトは広場と聖堂の敷地との関係を調整している:広場の空間は聖堂の囲い地の中で広がり、一方で柱列の2つの軸に沿って聖堂からはぎ取られた構成要素の配置は、もともとは内部であった空間と新しい空間との秩序を、外部に反映している。